日本書紀傳 卅三 巻一

和書
一〇五二二號

七十四

内閣文庫
番號 和 10522
冊數 156 (83)
函號 特 85 1

内一二六八三號

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
裏面記載のない箇所は省略
綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

明治七年甲戌七月以先師穂積重僊
稿本ニ校了

酒田縣管下羽後國飽海郡御代

敷地笠麿

文部省
消印
文庫印

内一二六八三號

日本書紀傳一十三之卷

神代上第二十一　寶劒出現章　穂積重僊　謹撰

是時素戔嗚尊自天而降到於出雲國鰐之川上時聞川上有啼哭之聲故尋聲不見往者有一老公與老婆中間置一少女撫

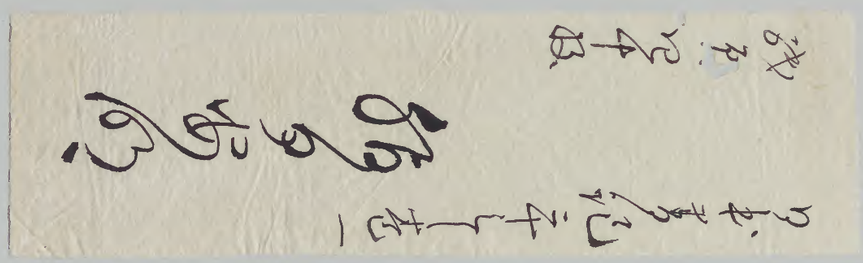
而哭之素戔嗚尊問曰汝等誰
也何爲哭之如此耶對曰吾是
國神號脚摩乳我妻號手摩乳
此童女是吾兒也號奇稲田姫
所以哭者往時吾兒有八箇少

女毎年爲八岐大蛇所呑今此
少童且臨被呑無由脫免故以
哀傷素戔嗚尊勅曰若然者汝
當以女奉吾耶對曰隨勅奉矣

素戔嗚大神始めて高天原より天降り著せさせ御在
—坐けるハ出雲國なていい非りけり其神逐ハれ奉ら

ハ給ひて天降りの御在り坐ける度と後るゝ其到り著せゝ御在り坐ける處るも異ありける此正書の趣ハ後の度の事ありけり此ハ上章より續きて然後諸神歸罪過於素戔嗚尊而科以千座置戸遂促徵兵至使拔髮以贖其罪亦曰拔其手足之爪贖之已而竟降焉是持素戔嗚尊自天而降到於出雲國簸之川上云云と云文るゝハ惣て正書ハ其大條理を云通らふ事と主こゝて其巨細るゝ事共ハ一書ゟ讓られたる者ゆゑハ例の此を正り定めて其事をるも別べき事ありける其ハ傳二十二　二百四十五丁ゟ論つゝへるが如く上章第三ノ一書ゟ既而諸神嘖素戔嗚尊曰汝所行甚無賴故不可任於天上亦不可居於葦原中國宜急適於底根之國乃共逐降去と有ハ右ゟ謂ゆる神逐の文るり其次ゟ于時霖也素戔嗚尊結束青草以爲笠蓑而乞宿於衆神衆神曰汝是躬行濁惡而見逐譴者如何乞宿於我遂同距之是以風雨雖甚不得留休而辛苦降告と有ハ其逐ハもさゝと御在り坐て此國土ゟ天降り御在り坐て後る處ニハ流離ハわさゝせ御在り坐ける御辛苦の御有狀を書り傳へゝれたる者るり其天降り著せさせ給へるハ此大八洲國ゟ為て其ゝ韓地ゟハ渡らせ給

へるまて有けり其ハ此第四一書ふ素戔嗚尊所行無狀故諸神科以千座置戸而逐逐之是時素戔嗚尊師其子五十猛神降到於新羅國居曾尸茂梨之處云こと所見たれハ其御在ー坐ー著せさせ給へるハ韓地なるが如く所見ゆれとも其下ふ初五十猛神天降之持多將樹種而下然不殖韓地盡以持歸逐始自筑紫國凡大八洲國之内莫不播殖而成青山焉と所見なる是ふて此大八洲國より其韓地ふ渡ーて御在ー坐ける御事の狀なむ著明ーりなる此を本とーて渡り出坐ーふらずなる何ぞなるハ韓地ふて持歸ーて御在ー坐すとこ云事の御在ー坐む故此大八洲國より往渡り座坐けれ然れハ右の衆神ふ此ふ持歸とこ事ハ有なりけまての御事と云めるる説ハ愈こ能其事を思いさめける御事と云者なりふ又此ふ就て其素戔嗚尊を逐い奉られー其高天原を此國土の事と心得めるる説なるとい愈以て云ふも足ぬ僻事と云者なるむ故其第四一書ふ見時素戔嗚尊即其子五十猛神降到於新羅國居曾尸茂梨之處乃興言曰此地吾不欲居逐以埴土作舟乘之東渡と有る下ふハ必其御在ー坐ー著せさせ給へる地名を脱せる者と聞ゆめり其下ふ到出雲國簸川上所在鳥上之峯時彼處有吞人大蛇素戔嗚尊乃以天蠅斫之劒斬彼大蛇時斬蛇尾而刃缺即擘而視之尾中有ハ神劒素戔嗚尊



国立公文書館
National Archives of Japan

尊曰此不可以吾私用也乃遣五世孫天之菩根神上奉
於天此今所謂草薙劍矣と有る此ハ遥ふ後の事なる
ゝて以埴土作舟乘之東渡と有ハ別の處ふ御在ー坐
ー著せさせ給へるなり其大神の此大八洲國より歸渡
らせ御在ー坐ける其軟略ハ已ょ傳二十二二百九十五丁ふ明
らめるが如く其初て渡來らせ御在ー坐けるハ口
訣ふ肥前國西南在五十猛島とそし肥前風土記ふ杵
島郡縣南二里有一孤山從坤指退三峰相連是名杵島
坤者曰比古神中者曰比賣神灵者曰御子神一名軍神
矣と所見なる杵島ハ借字ふ〳〵て樹島なる可きい然

る物ふて其御子神の下ふ一名軍神動則兵興兵と書
せるい即五十猛神と申す御名ょ合ると神名式ょ筑
前國御笠郡筑紫神社名神大と有ハ五十猛命ふ渡らせ
給へると又伊豫國新居郡伊曽乃神社名神大伊豫郡伊
曽能神社と有る伊曽ハ此神と有功之神と申す有功
の言の約なる者ゆゑと聞ゆゑと右の第四一書の初ょ
是時素戔嗚尊帥其子五十猛神降到於新羅國と云し
終ふ初五十猛神天降之時多將樹種而下然不殖韓地
盡以持歸遂始自筑紫凡大八洲國之内莫不播殖而成
青山焉所以称五十猛神命爲有功之神即紀伊國所坐

大神是也と所見たるを思ふに其東渡と云ふ即筑紫
小渡り御在し坐けるを其より紀伊國に渡りを給
へる御道次なりけるとこそ所思えたれ然れば右に
川上所在鳥上之峯云々と云文は此より後に次
度の御事なるが混じて其所に入たるなり其杵島
の事に就て出雲風土記に飯石郡來島郷伎自麻都美
命社坐故云支自眞と有は其五十猛命の御事に御在
し坐へし又古事記大國主神の御末に甕主日子神此
神娶天之甕主神之女宍那良志毘賣生子多比理岐志
麻流美神と云神名の岐志麻流は杵島在て此五十
猛命の亦名なりけりと別神の如く傳はりたる
に非ず渚其素戔嗚尊の韓地より歸渡りを御在し坐
て後に初て宮柱太知立て神留り御在し坐けるは傳
二十二二百九十二丁に云るが如く神名式に紀伊國在田郡
須佐神社名神大月次新嘗御在し坐すを和名抄郷名に須佐
と有と出雲風土記に飯石郡須佐郷云々神須佐能袁
命詔此國者雖小國二處在故我御名者非著木石詔而
即己命之御魂鎮置給之處然即大須佐田小須佐田定
給故云須佐と有る例を以思ふに其大神の御在し坐
けるを地名を以て定むる地名とは成るる可
し其紀伊國を本處と立て見るに第五一書に素戔嗚
尊曰韓郷之島是有金銀若使吾兒所御之國不有浮寶
者未是佳也乃拔鬚髯之即成杉人拔散胸毛是成檜
尻毛是成柀眉毛是成櫲樟已而定其當用乃称之曰杉

及櫲樟此両樹者可以爲浮寶檜可以爲瑞宮之材被可
以爲顕見蒼生與津葉戸將臥之具夫須佐之男八十木種皆
能播生于時素戔嗚尊之子號曰五十猛命妹大屋津姫
命次柧津姫命凡此三神亦能分布木種即奉渡於紀伊
國也と有ハ此大八洲國ハ御在ー生ての御事なるが
今何地ハ御在ー生て物爲させ給ひー故事とも知べ
からぬを熟事の狀を考ふるハ右の韓鄕之島是有金
銀若使吾兒所御之國不有浮寶者未是佳也と有ハ己
ハ此ハ住著せさせ御在ー生ー其以前ハ御在ー生ー
韓鄕の事を宣ひ出て我皇御孫尊の所知看も此大御

國より其を求ハ遣ハー給ハひ料ハ舩船を作給ハむ
と所思ー立せさせ御在ー生て諸の木共を生ー立さ
せ給へるなるハ右くハ其紀伊國をバ木國と作らむ
どの由緒を見るハ必初其國ハ御在ー生ー程の神議
ハこそハ御在ー坐つゝの第四ノ一書ハ五十猛命を即
紀伊國所坐大神是也と見え右ハ凡此三神亦能云ニ
即奉渡於紀伊國也と有ハ神名式ハ紀伊國名草郡伊
太祁曾神社名神大月次相嘗新嘗大屋都比賣神社名神大月次新嘗都
麻都比賣神社名神大月次新嘗所見て何社ハ神代の神
跡直ハ今も齋奉る神社ハて渡ーを給へるを以て右

の故事ハ出雲國よりハ以前ふゆ〳〵御事る〳〵と曉り
明〳〵し可くるし有ける此ハ抱りてこゝハ非れど
古語拾遺神武天皇段ハ仍
今天冨命率て置帆負彦狹知二神之孫以齋斧齋鉏始
採山材構立正殿云々故其裔今在紀伊國名草郡御木
麁香二郷採材齋部所居謂之御木造殿齋都所居謂之
麁香の有も其故事ハ依らせ給ひて山材と其國ハ採
〳〵め齋部をも其國ハ置
せさせ給ひけるふこゝ故此素戔嗚大神木種を大八
洲國内悉ハ播殖して青山と成給ひて後ハ高天原
ハ參昇らせ御在〳〵坐けるふこゝ上章第三ノ一書ハ
是後素戔嗚尊曰諸神遂我我今當永去如何不與我姊
相見而檀自徑去歟延復扇天扇國上詣于天云〻と有
る是るり此大神の再復上天ハ參上らせ御在〳〵坐け

る主意ハ右の檀自徑去歟の御言ハ在て萬ハ天照太
神の大御心ハ從奉らせ給ひて其大御命の任ハ行ハ
せ給ハいとるり此ハ草薙劍の御事を是神劍也吾何
敢私以安手（乃上獻於天神也又）第四ノ一書ハ此不可以吾私用也乃云〻上
奉於天と有が如く少りも己尊の自由（ホシキマヽ）るる私の御行
ハ成〳〵給ふ〳〵き御本性ハ渡〳〵せ給へるが故ハ此
度ハ其大八洲國を悉〳〵ハ青垣山と成〳〵給ひ金銀ハ
韓鄉ゟり取らせ給ふ爲ハ浮寶を作る設を成〳〵給ひ
て瑞宮を造る可き材木又顯見蒼生の家居と成す可
き具ハ至る迄ハ落も無く御心足もふ物爲させ給へ

り御事を天津朝廷ふ奏り聞えさせ給ひ旦其清心を以て生成り給へり謂ゆる五男神等を天照太神ふ奉らせ給ひて其日神の御討らひとして皇御孫尊を天降り奉らせ給ふひ御事を契り聞え奉らせ給ふもとして參上らせ御明在り坐けるふて貴ふ清く明き御心の御程るひ此ふ於て顕はれさせ御在り坐ける右等の事共の論ふ傳二十二四百ふ己ふ委く六丁

註(1)たるき其終ふ今則奉覲己訖當隨衆神之意自此永歸根國矣請姉照臨天國自可平安旦吾以清心所生兒等亦奉於姉己而還降焉と有て此ふ是時素戔嗚尊自天而降到於出雲國簸之川上と云文ふ相續く可き所なりける此御天降の御事と初度の事としてハ合ざる所るひ多在りけるハ傳二十二卷二百九十四丁ふ註るが如く古事記ふ彼是名推手名推神の八俣遠呂智の事を語申せる語ふ亦生其身生蘿及檜榲と有る檜榲ハ右ふ引る第五ノ一書ふ乃抜鬚髯散之即成杉又抜散胸毛是成檜と所見たる是其始るるを大蛇の身ふ己ふ生て有れハ大八洲國内悉く青山と成れる後の事るりと所見れハ其時世ふ甚久しき違ひ有る事と所見たり又此第二ノ一書ふ素戔嗚尊乃教之曰汝可以衆菓釀酒八甕と有る衆菓ハ第五ノ一書ふ夫須嚙八十木種皆能播生と有る是物るり己ふ右等の物共の天下一同ふ在ける狀を以見れハ此出雲國ふ天降らせ給へるハ後の度又其自天而降到於ふ非れハ叶ハざるを思ふ可

出雲國簸之川上と有ふ次第有る事るり第一ノ一書ふも素戔嗚尊自天而降到於出雲簸之川上と有て此

小同ジく古事記ハ故所避追而降出雲國之肥河上
在鳥髮地と有り古語拾遺ハ素戔嗚神自天而降到
於出雲國簸之川上と有て諸説此小同ジと雖も上ハ
辭へたるが如く其ハ此大神の初て天降坐し時の事
ハ非ず再度天降りして天降り御在し坐し著せさ
せ給へるなむ正説なりけるを然る分明しき傳もの
無きハ古人も前後を混りして其差別を立ざるが故
ハ彷彿し成れりけむと所思ゆれば事を正して明
らかなる事上件ハ註るが如し又第四ノ一書ハ是時素
戔嗚尊卽其子五十猛神降到於新羅國居曾尸茂梨之

處乃興言曰此地吾不欲居遂以埴土作舟乘之東渡到
出雲國簸川上所在鳥上之峯と有ハ初度後度の御天
降を混同ハ爲たる傳ハて右の東渡ハ到筑紫國
などて有けむを後度の事の出雲國の御天降を此ハ
列ねたるハ決めて誤傳ハ在べき事已ハ上ハたるが
如し唯第二ノ一書ハ是時素戔嗚尊下到於安藝國可愛
之川上也云ヘ是後以云ヘ眞髮觸奇稲田媛遷置於出
雲國簸川上而長養焉と有る此て實ハ信ひ可き説ハ
ハ有ける然れとも安藝國ハ夜須岐と訓べくして出
雲國意宇郡安來郷なりと出雲國と云けむと安藝と

依れなりけるり山陽道の安藝國と混じて其ふ就て ハ非ぬ説共こゝハ出來ふためれ口訳ふ云安藝國異説と云るも未其正しを得ざる説ふりけり神武天皇甲寅年御紀ふ至安藝國居于埃宮と有て可愛之川と埃と合れば然も思ふ可き事なれども此の安藝ハ安來の訓なれば其とい云難り故其埃宮ハ古事記ふハ阿岐國多祁理宮と有て神名式ふ安藝國安藝郡多家神社名神大社祢宜其宮を美祢有て此地の事と聞ゆれハ埃ハ可愛なり

ハたる称と思しければ此引合ふい成べくなり通説ふ裁たる玉木集説ふ可愛之川神武天皇御紀所謂埃宮之地而今三好川是也と云れども闇推なる事なり谷重遠ゞ今訪安藝國不聞有其縁と云ふ正しなり

ぬ可き 偖右の安藝國埃可愛之川上と云ハ出雲風土記ふ安來郷郡家東南二十七里一百八十歩神須佐乃烏命天壁立廻坐之尓時來坐此處而詔吾御心者安平成詔故云安來と有る此處ふ天降り來坐るなり其可愛之川上と云ふ可愛ハ同郡長江山郡家東南五十里有水精と有る是なる可し其地理を推すふ右の安來郷ハ郡家東南二十七里一百八十歩ふ在り其先ふ揖縫郷郡家東南三十二里一百八十歩と見え其先ふ毋理郷郡家東南三十九里一百九十歩所造天下大神大穴持命越八國平賜而還坐時來坐長江山而詔云くて有て長江山ハ即毋理郷ふ在を扨ふ長江山在毋理郷井

尻之中上小竹村云磐舟山と有る磐舟山と云る一名
も其天降り御在し着せさせ給へるハ動くすゞき所
由有も床しきを下ふ云る如く可愛川ハ今伯耆の大
川と云る是ふて風土記ふ謂ゆる伯太川の事るふ
源出仁多與意宇二郡堺葛野山流經毋理揖縫安來三郡
入于海有年魚伊久比と有ふ相叶へれば其山も江山ふりけ
むを長の言を冠らせて長江山とハ云るふて本より
同じ地ふる可く所思えたり此一書ふを引て古史第
六十七段徴ふ此安藝を舊く阿岐と訓て山陽道ふる
安藝國の事と爲るハ誤ふて風土記ふる安來郷を云

ふり藤原宣昌てふ人の著ハせる鳥上二水考證と云
書ふ夫安藝國者非國名也出雲風土記所載意宇郡安
來郷而今屬能義郡而作八杉郷者是也先輩泥文字混
於山陽安藝誤訓之阿伎能玖迩遂失其正矣宜改訓野
珠魏能玖迩也以郷称國者舊證多矣可愛之河則經流
於安來郷伯耆大川是也其源出於出雲國仁多郡能義
郡之堺葛野山而上流謂之伊志尾川北過毋理安來等
之郷而入于伯耆國經舟上及米子等之地而入海矣謂
之日根川也以其流伯耆總名之伯耆大川也出雲風土
記曰伯耆天川源出仁多與意宇二郡堺葛野山流經毋

理楯縫安來三郡入海割意宇郡爲能義郡故葛野山
葛野山在二郡之堺也東南與鳥上峯麓相近矣然則可
知伊志尾川之源不遠于鳥上之峯焉故其以眞髮觸奇
稲田媛自可愛之河上遷置於敏河之上長養者以近接
其堺也案谷重遠曰今詔安藝國不聞有可愛川者當矣
予按祝利萬呂者安藝國之人而盡心於日本書
紀之兵雖求可愛之河于安藝國卒不得其蹤又求有雲
藝二國接堺之地否亦無得之矣云予信其說故不復求
諸藝州專求諸雲州而得其舊跡也云云此考甚宜云云
云る如く毋理郷長江山即可愛之川の縁る時ハ兼
以て出雲國内の地名なる事明らかなる者なり但右ハ引
る風土記ハ伯耆大川と作れども諸本共ハ伯太
川と二所共ハ出なるを私ハ改たるハ非なり又然

る本有て引るゝ猶正すべしと雖と右の考ハ甚ミ奇
珍なりなる說なれども信ハ諾ひ從ふべき說なる者なり
但古史徵の右ハ引る前文ハ出雲風土記ハ天壁立廻
坐之と有ハ何時なりしと云事知べからぬを此時の
事と爲て記せる由ハ彼段ハ引る第四一書ハ東渡到
出雲國と有ハ新羅國より渡來坐る時を云なるべし
其新羅ハ到給ハさる以前天より降坐る時直ハ天壁
立極を廻坐て然て新羅ハ居著坐ると所知たり然る
ずハ何れの時廻坐ると爲も清云と有れども天壁
立極らを廻坐て安來ハ降坐るハ後の度なり新羅ハ
降坐るハ先の度の事なりければ
其さハ一ハ成べからざる者なり傳二十二二百九十六丁ハ
註るが如く右の出雲風土記ハ神須佐乃烏命天壁立
廻坐之ハ時來坐此處而詔吾御心者安平成詔故云安
來と詔給へる其五吾御心者安平成詔と云ふ御言ハ
も其天上ゆて冐御子をバ天照太神ハ奉らせ給ひて

文可愛と云ふ地名も八州起元章第一一書ニ謂ゆる唱和の御詞ニ可愛字を書れたるを其筭五一書ニ善ニ作れたる是なれ文者御心安平成と記給つるハ表くふさる地名なるも此時なども出来ぬるハ非トゝと思ひ

天津日繼ニ定奉〳〵せ給し今此三女神を携へ御在〳〵坐て遥なる天路を降り著せさせ給へ是ハ此ニ於て御心あむ情安く御在〳〵坐ける由あめけ〳〵し貴御在〳〵坐〳〵著せさせ給へるも正〳〵く出雲國ふるハ傳十五三百二十三丁ふ引る宗像縁起ふ孝靈天皇四年ふ出雲國簸河上より筑前國宗像ふ御遷行と有る孝靈天皇御世の事ハ宗像君ふの其國ふ下り住著たる年紀ふどふ在て其出雲國云〻の事ハ初て大天降り御在〳〵坐〳〵著せさせ給へめ〳〵地を云ふるふこゝろ然れど彼大蛇を平〳〵けさせ給ふる女神よでを伴ふハせ御在〳〵坐つ可きふ非れハ其出雲國の何處ゆ

此事ニ就て説有り下百八十六丁見べし

居奉〳〵せ給しけむ御事申すハ更ふり但上章第三ノ一書ふ即以日神所生三女神者使降居于葦原中國之宇佐島ニと所見たれハ其ゆり直ふ筑紫ふ渡〳〵奉〳〵せ給へるふる可き其委〳〵しき子細共ハ一朝一夕ふ云盡す可き事ニ非ず傳十五十六十七十八の巻ニ又二十二巻の首尾ふ註せれハ考合す可し又傳十九五百九十二御十三丁上十二丁ふ註るが如く素戔嗚太神の此度の天降ふハ其后神又御子神等又御伴神等を纂ひさせ御在〳〵坐て神幸行装束〳〵く整備へさせ給して天壁立極〻往廻り給して其安藝國の可愛之川上ふハ天降り著せさせ御在〳〵坐ける御事と所見たり其御子神と申すハ上件ふ

云る御三柱の女御子ハ更る り先ハ卽て天降り御在
し坐ける五十猛命大屋津姫命抓津姫命るどゝ此辭
左三柱恐所 児の御時ハ伴ハせ給へりけるを再辭て天降り御在
し坐けるゝめり又其后伸と申すハ長寛勘文ハ此大
夜之女命熊野大御神后坐と見えたる熊野大御神ハ
素戔嗚尊ハ渡〳〵せ給ひて大夜之ハ命ハ卽右の三神
の御但ハ坐り舊事紀異本ハ脈狹雄命尊要萬魂分姫神皇
産靈尊女生兒五十猛命妹大屋媛命次大抓津媛命と有を
又其勘文ハ降来伊豆毛國致熊野村宮柱太知奉而加
夫里支熊野大御神地祇神皇又御兒后大夜女命山狹

村宮柱太知奉而靜坐大御神三是也と有る此地祇ハ
天社國社の謂るゝ可〳〵て社ハ抱りたる事るり
神皇又御兒とハ神皇産靈尊の又御兒の由るり其三
是也と有ハ勘文ハ伊謝那支命要惠乃女命生大夜乃
女命次足夜乃女命若若夜女命三神此大夜之女命熊野大御神后坐
ゝと有る是るゝが右の神皇産靈尊又御兒るる由著明
き上ハ伊謝那支命要惠乃女命とゝ事有てハ前後打
合ざるを舊事紀異本ハ已ハ萬魂分姫と有て神皇産
靈尊女と有るゝ〳〵ハ其大夜之女命同神るる事論〳〵し
無〳〵且五十猛命を古事記ハ大屋毘古神と見え此筭

五ノ一書ニ妹大屋津姫命と有リ其ニ御祖大夜之女命の御名を襲ハせ給へる者と見ゆれハ愈神皇産靈尊の御女ニて天上ニ御在ーシ生ける時ニ娶ラセ給へるを此度ハ即て共ニ天降リ御在ーシ生けるニ決くらむ有ける其山狹村と云ハ神名式ニ出雲國意宇郡山狹神社同社生久志美氣濃神社と所見たる是なるが右ニ謂ゆる大夜乃女命足夜乃女命若夜女命三神の鎮リ御在ーシ坐す社是なり同社生久志美氣濃神社ハ出雲神賀詞ニ出雲國乃青垣山内ニ下津石根ニ宮柱大敷立氏高天源ニ千木高知坐須伊射那伎乃日眞名子

△の降到ハ久陀理都久ニ訓ベーシ其事ハ傳二十七ニ小云リ偖此

加夫呂伎熊野大神櫛御氣野命と有が如く神名同式ニ謂ゆる同郡熊野坐神社名神大の祭神ニて即素戔嗚尊ニ渡ラセ給へるを此山狹神社ニて其后神と相並シ御在ーシ坐す御事と所見たり但此ハ其后神を主ガ故ニ却リて其天夫神ハ其前社ニ渡ラセ給へる御事なり偖風土記ニハ夜麻佐社と二所ニ出たるを式ニハ右の如く御名を惟ニ載ラれたるらむ甚く美たき御事ニなり御在ーシ坐ける右の山狹神社を抄ニ今云山佐村屬能義郡而熊野村東南也○自天而降到△ハ即と云ハバ出雲理郷の内なるべし

高天原より天降リ御在ーシ坐ける著せ給ひニて佗處より渡來坐るニハ非ずーシ故古事記ニ其足名椎手名椎神ニ來由を示ーシ給へる御言ニも示答詔吾者天照太御神

也伊呂勢者也故今自天降坐也と有る是なり此の一書の趣も然なるを唯第四一書に降到於新羅國と有て其より東渡到出雲國簸川上所在鳥上之峯と云るハ後に御天降坐る事を一に云て其ハ混ひつゝる傳る事已に傳二十二 二百九十二丁 上六丁 に己に辨へたるが如

（又三十七丁に委しく注）

古事記御天降段に曰く故尓鳴女自天降到云々（天）自天降到天若日子之父亦其妻云々と有が更なり天孫降臨章第三一書に曰く時天稚彦之妻子縱天降到と見天海宮遊行章第二一書に曰て若從天降者當有天垢從地來者當有地垢も云々など何れも上天を云なり ○出雲國ハ下 十 百 丁に云べし ○簸之川上ハ古事記に肥 上 河上と作て肥字を上聲に樋の如く訓む可き習有る事なり此地の事ハ出雲風土記に大原郡斐伊郷屬郡家樋速日子命坐此處故云樋神亀三年改字斐伊と有て其官帳に載る樋社と云ふ二處出たり即神名式に謂ゆる斐伊神社同社斐伊波夜比古神社と有る是なり此ハ傳十八 三十一丁 に謂ゆる瑞珠盟約上章第三一書及上章第三一書に所見たる六男神の中なる熯之速日命に御在て坐て即天津彦根命の亦名ふるむ渡せ給へりけると其此神の此國に御在て坐ける御事ハ同記に意宇郡郡家正東卅九里一百二十歩天乃夫比命御伴天降來坐伊支等之遠祖天津日子命詔吾將坐社記故云社神亀三年改字屋代と所見た

△其郡名大原の所に今有郡家處號云斐伊村と有る地なるが故に右に屬郡家と云るなり 屬

る是ふて意宇郡と大原郡とい地も相接ける處なるを斐伊ハ其天穂日の命と共ふ天降り御在ー坐て住給へりー所以を以て名と成り又屋代ハ後ふ其御靈を留めさせ御在ー坐ける地ふて有けるを其ホ名を以て樋速日子命と書せるゝ別神の如く見ゆる者なりーー然れば彼斐伊神社い彼大蛇を言向させ御在ー坐ける由ふ縁て素戔嗚尊ふ渡ゝ也給ふ可き事申すも更なる御事なり然ハ(樋)敵川と云名ハ後ふ天津彦根命ホ名樋速日子命の住給へりー以来日の地名なるを始ふ及ぶー て然號けそる者ふなむ有べき

香具山日記ふ出雲與伯耆國之堺宜敵川と云るハ其鳥上山ふ就て云なり可ー俗

但四神出生章第六ノ一書伊弉諾尊の斬迦突智神を斬給へる所ふ復劒鐔垂血激越爲神号曰甕速日神次熯速日神と有る其ハ此と同名ふーて異神なり傳十卷九十九丁ふ云り又此の熯之速日命の名義ハ傳十五卷二百八十五丁天津彦根命の下ふ註せる如くふて別と なり 倭敵川ハ風土記ふ出雲大川源自伯耆與出雲二國堺烏上山流出仁多郡横田村郎經横田三處三澤布勢等四郷出大原郡堺引沼村郎經來次斐伊屋代神原等四郷出出雲郡堺多義村(經)河内出雲二郷北流更折西流郎經伊努杵築二郷入神門水海此則所謂斐伊河下也と有り此ふて其水源より流末ふ至る迄次(序)第明ゝなり此ふ依る時ハ其謂ゆる斐伊郷を經て流るゝ故ふ斐伊河とい云る

△三有り又右小並びて室原山郡家東南廿六里備後與出雲鹽味二國と堺有葛

△横田川源出郡家東南三十五里鳥上山此流所謂斐伊大河上有年魚又少少

△其風土記小心と著て見るまに仁多郡の間よりて斐伊河上と云い其より下りて飯石郡にて斐伊河と云い其より大原郡至りて斐伊大河と云ひ又出雲大河と云ふ名と成り若て斐伊と云名ハ同記

ふて其大名ハ出雲大川ゟ事上十丁ゟ出たる伯耆大川の例ゟ同ゝ故其鳥上山ハ仁多郡ゟ在て同記ゟ鳥上山郡家東南廿五里伯耆與出雲之堺有鹽味葛と見えたる是よて古の意宇郡今の能義郡ゟ接ける地ゟりと云り又同記仁多郡室原川源出郡家東南廿六里室原山北流此則所謂斐伊大河上有年魚麻須鮒鱧等類と有る室原山ハ右の鳥上山ゟ僅ゟ一里を隔たれば共ゟ出雲大川の水源ゟり又飯石郡斐伊川郡家正西五十七歩西流入出雲郡多義村と所見たれい此處ゟ漸ニ斐伊河とハ云ふ(有)けり右ゟ引る郷名ゟ斐伊郷有る此郷を過る

△駿河風土記ゟ引る者其山日記ゟ出雲國與伯耆國之境有駿川と有ハ水上ハ其二國ゟ跨うる鳥上山ゟ出る其水ゟ出る其源ハ遠ゟ陸北る夏右の風土記の文を以て知べし又

△其天淵と此駿川上山とハ全く合さる事下百仟ゟ辨ゟ可く又

△又灰火小川源出灰火山斐伊河上有年魚又阿伊川源出郡家正南三十里遊記山北流入斐伊河上有年魚麻須又阿倍川源出郡家西南五十里御坂山入斐伊河上有年魚麻須と有此く仁多郡の内ゟ斐伊河上ゟ云側なり

程ゟり大河と成れるが故ゟ斐伊河の名ハ有るりけ〳〵△雲州樋河上天淵記ゟ山陰道出雲州仁多郡三澤郷樋河上天淵者上古海潮来往之溪曲也今既潤水衰ニ然爲漲流洄洑之淵矣去杵築海濱十許里也去温泉者十餘町之下流有焉中略又河西山腰泉涌出焉以樋通之河東故呼水爲樋河略と有る此樋河の説ハ風土記の趣と異ふ〳〵て後人の妄作ゟ出たる者ゟり取へきゟ非す右の出雲大川の下ゟ云る横田三處三澤布等の四郷の内ゟ横田ハ風土記ゟ横田郷と有ハ鳥上室原西山ゟ接く郡家東南廿一里云ると所ゟり(三屋記ハ)飯石郡三屋川源出郡家正東一十五里多加山北流入斐伊川有年魚と有る是ゟり又幡屋小川源出郡家東北幡筈山南流無水三水合西流

△記傳九巻ニ云ヒ出雲大川の下古ヘ神門の水海ニ入ルと寛平の頃大水出たりし時より流替りて今ハ伊努郡より東又流れて國中の入海へ國中と東より西へ遠く入る海ニて古ハ潮海なりしと肥大河の流入る故ニ其河水ニ衝れて今ハ潮入ず淡海なりとゞと有り

入出雲大河と見え又屋代小川源出郡家正東除由野西流入斐伊大河無魚とも有て如此く衆流の一ニ合て出雲大川と成るなり故斐伊大河とも云るなり△偖右の神名式ニ斐伊神社有て次ニ同社坐斐伊波夜比古神社御在〳〵坐ニ其を天津彦根命の亦名と見る時ハ斐伊神社ハ其御祖素戔嗚尊ニ渡〳〵せ給ふ可〳〵ところ弟が強ざる説ニて其證と成す可きハ傳二十二三百四十四丁武藏國造の下ニ云る神名式ニ武藏國足立郡氷川神社名神大月次新嘗頭註ニ氷川社日本武尊東征之時勸請素戔嗚尊也と有り入間郡中氷川神社日本武尊東征之時勸請稲田姫命也とも有ればこの國出雲より勸請〳〵せ給へるを其本國ニて氷川と云社ハ何處ニ〳〵御在〳〵坐ム彼大蛇を平げさせ給へり〳〵由ニ縁て右ニ謂ゆる斐伊神社ニ素戔嗚尊の鎮り坐す御靈を勸請ら世給へる事著明き者なり〳〵然るニ惣國風土記ニ氷川神社神田百東十字田四圍觀松彦香殖稲天皇孝昭御宇三年戊辰素戔嗚尊大己貴奇稲田比咩合三座也と有れば已〳〵より勸請ニる日本武尊此社ニ就て御祈請の御事共有て謂ゆる官社ニ〳〵彼成たるなる可くや侍〳〵む扶桑見聞私記六十五ニ建久八年四月朔日淺草觀音堂ニ御參り其より直ニ板橋ニ拭り中仙道を御通り申

刻大宮ふ御著神主御旅館ふ伺候ー御祈禱の巻數を
献ず御前ふ召て神の由緒御尋有り神主申云此神大
已命ありこゝ大社を勸請ー奉る故ふ号大宮武奉申
大宮明神此神昔出雲國氷川上ふ官居ー給故云ふと
有て大社と氷川上とを混ドたるい如何なる事なが
ら此ふて此氷川神社の本國出雲ふて渡ーセ給へる
〳〵ハ其氷川上ふ官居ー給ふと云るじ斐伊神社ふ
渡ーセ給へりける神階の御事ハ三代實録ふ自觀元
年正月廿七日甲申奉授武藏國從五位下氷川神從五
位上同五年六月八日　授武藏國從五位上氷川神

諸社一覽ふ氷川社在江戸四谷此所入間郡也と見ゆ其

名奇天稚彦歟ともあり

齋明天皇四年御紀ふ悲哭と美祢須て有る祢ハ音と立て歎ク事なりの之那久ハ音樂なる可し

正五位下同七年十二月廿一日　授武藏國　位
氷川神從四位下同十一年十一月十九日　授武
藏國從四位下氷川神正四位下元慶二年十二月二日
授武藏國正四位下氷川神正四位上と所見なり
此氷川神社より勸請ハ傳二十三卷ニ百四十四
丁ふ註るが如く其武藏國造ハ出雲國造同祖ふて共
ふ天穗日命の子孫なれば其本國ふて仕奉れりー神
を此ふル移ー奉れる武藏國式社考ニ云物ふ三箇島村長宮大明神祭神大
己貴命なり或云氷川村ふ在りとも見えたり倶祭神
ハ氷川神社ふ同ーくして是ル　○川上ハ謂ゆる斐伊
右の三神を合せ祭るふこゝ
河上ふて筭四一書ふ謂ゆる鳥上之峯是なり傳二十
七三十二丁ふ云べー○啼哭ハ祢那久と訓ム續紀第五十

一詔小悔弥惜弥痛弥酸弥大御泣哭之坐止詔第五十
八詔小悲備賜比之乃比賜比大御泣哭川川天坐麻之有
る泣哭を詠り言葉二十四丁小夜者毛夜之盡晝者毋日之盡
哭耳呼泣乍在而哉又四十四丁聞者泣耳師所哭語者心曾
痛三二十四丁小哭者泣友色尓將出八方又二十九丁毎見哭耳
所泣古思者又五十三丁蘆鶴之哭耳所泣朝夕四天又朝夕
哭耳曾吾泣君無二四天又六十丁朝鳥之啼耳哭管四十四
丁小古人曾益而哭左倍鳴四又三十四丁手小童之哭耳泣
管又三十八丁心尓咽欲哭耳四所流五三十八丁小可尓可久尓
思和豆良比祢能居志奈可由又雲隱鳴往鳥乃祢能尾

文ハ世世爲便不和哭耳之面目泣

志奈可由九三十三丁小行因射立嘆目惑人者啼尓毛哭乍
又三十四丁所射十六乃意毛徧葦埴之思乱而春鳥能啼耳
鳴乍又三十六丁新喪之如毛哭泣鶴鳴又行來跡見者哭耳
之所泣十一二十二丁小念出而哭者雖泣灼然人也可知嘆
爲謹十二四十二丁小哭耳吾泣痛毛爲便無十三二十丁小毎
見哭耳之所泣十四六丁小伊毛我名欲妣氐吾乎祢之奈
久奈又伎美我名可氣氐安乎祢思奈久流又十丁筑波祢
尓可加奈久和之能祢乃未乎可奈岐和多里南牟又二十
一丁伊米能未尓毋登奈見要都追安乎祢思奈久流十五
三十一丁小欲流波須我良尓祢能未之奈加由又三十六丁須敵

二十小反側戀香衾將居足垂之泣耳八將哭

泣

毛奈伎古非能美之都都祢能未之曾奈久十九丁ふ灼
然啼ふ之毛將哭二十四丁五ふ安佐欲比ふ祢能米之奈
氣婆ると有て祢ハ泣く時の音聲なり那久ハ音聲を立
て歎くを云なり又祢那久の祢を省きて唯ふ那久と
云ふを立る事ハ含りて有れば有る事なるが其如くふて哭ハ音を立る
有涙曰泣も有る事なるが其如くふて哭ハ音を立る
よ係り泣ハ其鹽 ○聲ハ音と並びて有心の音を許恵
蚤る狀ふ云り
と云ひ無心の聲のと於登と云が本ふて其聲より韻
の遠きふ及ぶと聲の音といふ云なり偖其聲の假字ハ
一万葉五十七丁ふ毛ニ等利能已恵能古保志枳十五丁ふ
鳴蟬乃許恵乎之伎氣婆十七三十四丁ふ鳴鳥能許恵乃孤

悲思吉支四十三丁保等登伎須許恵尓安倍奴伎二十七丁三十
小春鳥乃已恵乃佐麻比又四十五丁宇具比須乃許恵波須
疑奴等ると有て何れも許恵の假字なるハ傳二十二
六十一丁ふ註訝るが如く言ハ心音の義ふて心ふ思ふ事を
打出るふ心其氣の喉内より出て口裏の諸部ふ觸て音を成
す即其言辞なるふ例ーて思ふふ許恵ハ心末の約れ
るなりけり宇禮を切て恵と云例ハ万葉ふ多く木末
と書て許奴禮と云言の有ハ木之字禮の語なるふ大
嘗祭儀ふ椎枝を古語所謂志比乃和恵と有ハ椎之弱
末の義なると其宇禮を切めて恵と云る是なり偖許

惠を心末ゐ〳〵むと云ふ右の言ハ心音ゐる小等一く
して心小思ひ有る時ハ終小音小出さゞる事を得ざ
るまて聲即是るり然れば人聲畜聲鳥聲出聲ゐゞ生
類小多く云事小て金石絲竹小出るとゞ音と云て聲
といゝ云ざるゐり其生類小も時とゝて音と云ひ金
石絲竹小も聲と云事の無小非れども各其本意ゐ
るゝ非る可し聲字說文耳部小聲音也从耳殼聲(聲)
殼籀文磬と見えて徐諧ゞ通論小万
殼籀文磬と有り物之音爲聲八音中惟石聲精詣入於
耳故於文耳殼爲聲殼古磬字也と有り又字彙小氣有
氣斯有聲故云聲氣聲成文爲音故云聲音楊子曰言心
聲也と有ハ氣小觸て聲有り其聲物小觸て音を成す
謂るり月令疏小雜出曰音單出曰聲と有る是小(即)て右
小聲成文を雜出と云ひ有氣斯有聲を單出と云ゐ

姓氏錄右京皇別下ハ佐伯直ニ誓田天皇爲定國堺車駕巡幸到坐播磨國神崎郡尾村東山岡上于時青葉乘自岡辺川流下天皇詔應川上有人也仍差伊許自別命往問と有ゐ文の趣同ド

ゝり○素聲古事記小ハ此所を此時箸從其河流下於是
須佐之男命以爲人有其河上而尋覓往者と有ハ鰍川
上より著(箸カ)の水小就て(の隨意小)流下ゝ小就て其川上小入有ゆ
りと所思ゝて尋つゝ覓上り幸行ゝ由ゐると此ハ其(御紀の如く)
川上小啼(ネナリ)哭を聞省ゝて人の住居るゐめりと所思ゝ
て尋つゝ覓上ゝせ給へる趣ゐて其所以別ゐるゞ如
ゝと雖(も)此を考ふるゝ地神本紀小ハ此二を合せて
素戔嗚尊到於出雲國鰍之河上名鳥髮地之時自其河
上箸流下者矣素戔嗚尊以爲人在其河上而尋覓往者
聞河上有啼哭之聲故尋聲往上と有ゞ如く箸の流下

ゆるを遥ふ其流末ふて見行ハ御在て坐て川上ふ
人有けりと所思り看して覓其水ふ傍て上り幸行し
けるを果て其水源ある處ふ人の啼哭く聲を所聞
看させ行給へる趣ふて是信ふ然有ぬ可き御事ふ
ふし渡せ給へりけるに然れども箸の流下ゆるハ決
めて敏川ふい有べくず第二一書ふ是時素戔嗚尊
下到於安藝國可愛之川上也彼處有神名曰脚摩乳手
摩乳と所見なれば上十二丁ふ謂ゆる風土記の伯太川
ふて即今伯耆大川と云る是ある但此ふてハ地理甚
く違へるが如くふれども然ずず其烏上山ハ仁多郡

ふ在て風土記ふ伯耆與出雲之堺と注て其意宇郡伯
太川の事を同記ふ源出仁多與意宇二郡堺葛野山と
所見たれば相接ける地ふて斐伊川と伯太川と
流末ふてハ十里許も隔在らむを水源ふてハ僅ふ
る程ふて有ければ地理の違へるふい非ずして傳の
狀の異るふり偖素戔嗚尊の尋つゝ上り坐ていハ其
可愛之川上ふて大蛇を殺給へるい敏川之上ふる
者ふゆ思混ふる事勿し地神本紀の右の前文ふ到于
愛之河上所在烏上峯と云事ある可て然れば古ふ意宇
郡以東をば安藝國と云ひ仁多郡以西をば出雲國と云て二國ふて尋ハ多豆祢氏

今按三書ふ其斬蛇之地則出雲国簸之川上山是也と見へたる是ふり

と訓べし万葉九三十六丁小冬葛藟都良尋去祁禮婆と有
ハ葛藟葛ハ草叢の下を這ふ物ゆゑ有けれい探索る
義を以て尋去の發語ゆい置る物ゆゑ然れば右小引
る古事記ゆゑ尋見上往の尋も多豆祢都と別ふ
訓を加ふ可きゆゑ古今集春上小月夜ゆい其とも見
えず梅花香と尋ねてゞ知べゆけ又神樂木綿作
ふ由本不川久留志名乃波良仁也安佐太津祢安佐太川
祢安佐多川祢也末安佐太川祢万志毛加美曽也云こ
本安佐太川祢吉美毛可美所ゆゑ見えたり右の万葉ゆる
尋去祁礼婆を都岐氐曲祁礼婆と訓り其ハ上小取次
す追任去祁礼婆と云附對ふ處ゆゑ其方然る可き

此尋字海宮記行章第ニテ繁ハ麻迩ミと訓て旦繁ハ八一書ゆる隨其訓有小並ヘ多リ

三十小天天仁記有神曽好應祀九祥小冬葛藟都良尋去祁禮婆

ふや但其後ゆり探索るの方ふ見る時ハ楯多豆奴ゆゑめり又此尋字を登末氐こも訓
べし其例ハ欽明天皇六年御紀小膳臣巴提便使云こ日
晩停宿小兒忽亡不知所之其夜大雪天曉始求有虎連
跡云こ尋至巖岫拔刀曰云こ今夜兒亡追蹤不見至と有
る尋字を登末氐と有て下ゆゑ不見至ふ應へたる事全
此の狀小相似たり万葉千六二十七十小所射鹿子認河邊
之和草身若可信乎佐宿之兒等波毋十九十丁小夜具多
知乎寢覺而居者河瀬尋情毛之奴乎鳴知等理賀毛ふ
と有る認又尋ゆゑ有ゆゑ是ゆゑ古今集賀部ふ亀居尾の
山の山石根を求て落る瀧の白玉千代の數ゆゑも」と有る

求亦右ハ同ジ藻鹽草ハ求來の字を登米久流と訓
伊傳又毋曾韋流又於布又須那波知又比呂又阿多都
又多知麻知と訓て登牟といい無れども地神本紀ハ
尋を登米と訓たり ○不見往者を麻岐伊傳麻斯志加波と訓り余見
字ハ古事記八神段ハ（其御祖神咒乍求者と有て求字を訓ミ次ハ）
木俱漏逃而去と見え又八千弓神御歌ハ夜斯麻久ハ
都麻ニ岐迦泥豆ル詠（又ハ夜麻賀多ハ麻岐斯阿多泥都岐とも見ハ）給し其御天降段ハ此地者向
韓國眞來通笠沙之御前而云こと有を此章ハ薈完
之空國自頓丘不見國行去と見えたる下ハ不見國此云矩
貳磨儀と注され其第三一書ハ薈完胸副國自頓丘（と見えし第三一書ハ薈完空國自頓丘不見國行去ハ）
不見國行去と有り此を纂疏ハ不見國者求覓可都之邑也

（ハ下ある行不見と麻岐伊傳麻須と訓ケて此と同一備此き此ある其下十二行ハ丁ハ云べし）
（ハ第三十神ハ於保久米能麻須良多祁ハ佐吉ハ多ハ由岐登利於保世山河毛淳波祢左久美ハ布美等保利久ハ麻登之都ハ有り）

と注させ給ハ繼体天皇七年御紀ハ載ル所たる皇太
子御歌ハ野絕摩俱保都摩ニ祁賀泥底と有を釋ハ妻
の異なるよハ非す備此ハ如此其人聲を認て見たり
幸行しては其天上すり再天降り著せさせ御在ー坐
て直ハ其住處を定せさせ給ハむ御心御在ー坐つル
ばるめ 備比の見任者を今一の訓ハ毋登米伊傳麻斯
志加婆と訓ル古本又新宮本ハ麻岐と有
ハ從ふ可ー通證ハ玉篇不見見俗字廣韻求也魏志管輅
傳見索餘光と云り若て口訳ハ尋聲不見往者聞哭聲而

（ハ又海宮遊行章ニ既失兄鈎無由訪ハ見其第三一書ハ海神於是擥集海魚不見問其鈎ある不見も上の例あり又見用ひ有る不見も上の例あり又見）

○雖不見也ハ所見ハ分ル度會宮儀式帳ハ天照大神ハ五ハ新見たり此を以見るハ求めて
高天原ハ坐ス見志麻岐賜志處ハ志都真利坐ス又摂津風土記ハ住吉大神現出而巡行天下不見可住國又尾張風土記ハ（風土記ハ）
と云名義抄ハ見又覩と毋登牟
とも美流とも有り不見を於掃侶久とも有れども其字
て直ハ其住處を定せさせ給ハむ御心御在ー坐つル
ばるめ 備比の見任者を今一の訓ハ毋登米伊傳麻斯
志加婆と訓ル古本又新宮本ハ麻岐と有
ハ從ふ可ー通證ハ玉篇不見見俗字廣韻求也魏志管輅
傳見索餘光と云り若て口訳ハ尋聲不見往者聞哭聲而

求亦右ニ同ジ藻鹽草ニハ求來の字を登来と訓ム
伊傳又毋曾韋流又俗右の尋字を名義抄ニ多豆奴又都
又多知麻知と訓て登牟と い無レ ども 地神本紀ニハ
尋を登来と訓たり ○不見往者を麻岐伊傳麻斯志加婆と訓り余見
字ハ古事記ハ神皃ニ亦其御祖神哭年求者と有て求字を訓ミ次亦
木俣漏逃而去と見え又八千矛神御歌ニ夜斯麻久ニ
都麻ニ岐迦泥ニハ詠給し其御天降段ニ此地者向
韓國眞來通笠沙之御前而云こと有を此章ニハ薦完
之空國自頓丘不見國行去と見えたる下ニ不見國此云矩
貳磨儀と注され其第二一書ニハ薦完胸副國自頓丘
不見國行去と有り此を纂疏ニ不見國者求覓可都之邑也

と注させ給し 継体天皇七年御紀ニ載たる皇太
子御歌ニ野絕摩倶保都摩ニ祁賀泥底と有を釋ニ妻
不見加祢底也難不見也と所見たり此を以見るニ求めて
見るを不見とハ云ふべけれ名義抄ニ見又覩を毋登牟
とも美流とも有り不見を於掃倍久とも有れども其字
の異なるよハ非す俗此ニ如此其人聲を認て不見上り
幸行してハ其天上すり再天降り著せさせ御在坐
て直ニ其住處を定せさせ給ハし御心御在坐つれ
ばなり 俗比の不見往者を今一の訓ニ毋登来伊傳麻斯
志加婆と訓ム古本又新宮本ニ麻岐と有
ニ從ふ可し通證ニ玉篇覓覓俗字廣韻求也魏志管輅
傳覓索餘光と云り若て口訣ニ尋聲不見往者聞哭聲而

（古事記黄泉段ニ往の字ヲ追ト訓ミ其往ノ字ヲ来ノ字ニ換テ）

起悲哀尋其處也と有れと○往を伊傳麻須と訓るハ
も然のミなハ非る可し
四神出生章第六ノ一書ハ何来之晩也と云て追来追と有る来字を
も然訓るハ就て傳十百三十九丁ハ記傳を引る註るが如
く此言ハ出坐と云意ハ出たるらしを其往給ふよ
来給ふハも云事常る者ゆ然れば往を送りて出
坐と云を来るを迎へて出坐と云ル其戸外ハ出給ふ
義を以て云るハ天孫降臨章ハ既而皇孫遊行之狀也
者云ニ到於吾田長屋笠狭之碕矣云ニ故皇孫就而留
住時と有て初ハ遊行と書て出坐の意るハ中ハ到と
記して往至の義るハ終ハ就而留住と有て住著給へ

（其第三ノ一書ハ乃逐言来意第四ノ一書ハ迎入坐定因問来意）

る由るハ其第二ノ一書ハ天照太神之子所幸道路有
如此居之者誰也敢問之衢神對曰聞天照太神之子今
當降行故奉迎相待云ニ復問曰汝何處到耶皇孫何處
到耶云ニと有て上ハ所幸と云て下ハ到と受たる事
右の例ハ同ク海宮遊行章ハ延内之坐定因問其来意
と有る来を伊傳麻須と訓る事上るる四神出生章ハ
同ク又其第二ノ一書ハ乃尋濱汀而進第八ノ一書ハ
隨其汀而進者るど有ハ進字を訓り其第三ノ一書ハハ
客是誰者何以至此第四ノ一書ハ今天神之孫辱臨吾
處第六ノ一書ハ是時第往海濱低徊愁吟云ニ故尋路而

往(イデマス)ニ問曰天神之孫何以辱臨(イデマシ)乎と有て凡神代紀ハ見えたる所右の如し又行字をも然訓る事紀記の常なり其外幸をも行幸をも所幸をも就をも訓む事常なり又万葉ハ御駕をも伊傳麻須と訓たり右の狀ハ字ハ様ニハ異なりと雖も又新宮本ハ此往字を伊麻須と訓み其ハ行坐日の約なるなり到ハ往足(ユキタル)なると同ト意なるなり古事記明宮段大御歌ハ須久(志那)陀曲布佐ニ那美遅袁須久須久登和賀伊麻勢婆夜許波多能美知迩阿波志斯袁登賣と有る伊麻須是なり万葉三五十七丁ハ離家伊麻須吾妹乎停不得山隱都礼情神毛奈思十五四丁ハ大舶乎安流流美尓伊多之伊麻須君

(熱田大神實録起ハ此御紀を引る物なるハ且老翁與老嫗と有り然る本の有りなる可し)

都追乎許等奈久波夜可敬里麻勢二十四十四丁安之我良乃夜敬也麻故要氐伊麻之奈婆多礼乎可伎美等弥都ニ志努波乎ふど有る皆然り此ハ就て思ふハ万葉一巻十丁ハ吾瀬子之射立爲宗五可新何本と有も往立せりけむなる可く世九丁ハ佐保川尓伊去至而と有も往去至りてなる可く皆往(徑)の義ハて有なりけり○有一老公與老婆の一字をバ比登理と訓み右の老夫婦を指て云なり又此老公を纂疏本及地神本紀共ハ老翁ハ作り古事記ハ老夫與老女二人在而と有り偖老公老婆ハ次ハ少女と有ハ對へたる者ハ一て其少ハ洲起元章ハ少男此云鳥等孤少女此云烏等咩と有ハ少男(オトコヲトノ)子少女(ヲトメ)の義

ふて幼稚き間の称なると其より長ふび老すけ行て
盛年なるふい唯ふ男女と書て袁と云ひ賣と云を稍
年高く成れるをば老公老婆と云事人の善知れるゝ
如し其女男少女の事ハ傳六巻七十一丁ふ云ひ袁能
古賣能古の事ハ傳二十二巻三百二十六丁ふ云
ひい合せ讀て其差別有を知へし和名抄ふ翁老人也和名於岐奈と有
て次ふ老公日本紀私記云老公訓與叟同一云叟上同老
又称也と見え次ふ古老遊仙窟云古老和名於岐奈比
止今按云古老又一云老舊一云日本紀云老宿同上と有
り又者宿日本紀私記云布流於木奈と見えたり又嫗
和名於無奈老女之称也と有る無ゝ美の轉ふるふて

（武い袁能古袁美那と云ふ）

（和名抄父母類ふ父母と知ふ波ふと有を祖父祖母を於保知於波と有ふ大父母の義なる上ふ曾祖母を於保於保知於保於波と有ふ大父大大母なる日如し父大大母なる日如し其高きを大と云例是なり）

老公ハ於伎那老婆ハ於美那ふる者ふり若て其於ハ
大の義ふ〜て少男少女の反ふり伎と美とハ傳五
ふ註るが如く伊弉諾尊伊弉冊尊或ハ沫蕩尊沫那
美神又ハ神漏岐命神漏美命ふど申奉る岐美是ふて
男女の謂ふり那ハ長の意ふて仁德天皇五十年御紀
武内宿祢ふ令賜給へる大御歌ふ多莽者破屢宇知能
阿曾。儺虚曾破。豫能等保臂等。儺虚曾破。區珥能那餓臂
等。と有を釋ふ世遠人也又國長人也と有る長人の謂
ふり此大御歌ふ答奉ふる武内宿祢歌ふ阿礼許曾波
余能那賀比登と有り又那を那と云る例ハ四神出生

（遊行宣第二書ふハ長老を於伎那と訓り）

（袁登賣と後ふ袁美那と云ふ小女長ふて長りたると云ふ）

（那代命蓑神）

章第六二書ニ所見たる神名ニ級長津彦命級長戸邊命と有る長即其的證なり又和名抄老幼類ニ専日本紀云専領二字讀太宇女子古語也今呼老女爲太宇女と有る太宇女ハ堪女の謂なる事傳二十卷十丁石凝姥命の下ニ註るが如く次ニ手佐女ハ長女ニして物ニ長たるを云なり又源氏卷ニ人並ニ少し成り名ー長なるべしと云ふ袁登那ハ家長を然訓ミ毛詩ニ傳御を宗臣之長也と有リ又前漢書ニ高年老長人所尊敬也と有る老長も然訓む字なる其袁登那ハ少年の者ニ對へ云称なるを偖老公老婆ハ大君長大女長なるニ就も考合す可ー

傳十四三十丁長せる

て丹後風土記ニ干時有老夫婦其名曰和奈佐老夫和奈佐老婦と有て其神と聞えて神名式ニ阿波國那賀郡和奈佐意冨曽神社有る和那佐ハ右の老夫婦の名

△其ハ土佐日記ニ淡路の多々宇女と云有ハ和名抄ニ今呼老嫗多々宇女と有が如く老女の称なるを其下ハ淡路嶋の大の子と有ハ大伎子の音便なり此を以て老ニ大の義有とるむ曉る可しゆる

△文京行天皇四十年御紀の氣燭者を事記ニ御火燒之老人を見へ又顯宗天皇元年御紀ニ召聚老宿も有ハ上ニ引る和名抄ニ私記を布流加ミ木と云と有る是也猶

ふり意冨曽ハ大長ニして其老夫老婦の謂是なり神武天皇戊午年御紀ニ乃椎根津彦著蓑衣服及蓑笠爲老人貌又使宗賜被箕爲老嫗貌云ニ羣虜見二人大咲之曰大醜乎老父老嫗と有て老夫老婆を老人老嫗とも作ルたり△万葉十六九丁著有老嫗翁號曰竹取翁云ニ即作歌云ニと有る和歌ニ端寸八爲老夫之歌ニ丹云ニ十七四十五丁ニ多夫禮多流之許都於吉奈乃十八三十五丁ニ久佐麻久良多比能於伎奈等於毋保也天又三十七丁須理夫久路伊麻婆衣天之可於吉奈佐備擧年ふる所見たり取老婆を老女と書く事ニして古事記朝倉宮段ニ

引田部赤猪子ヶ参ル所を天皇既忘先所命之事問其赤猪子曰汝者誰老女何由以参来乎赤猪子答白其年其月被天皇之命仰待大命至今日経八十歳と有る是るり又顕宗天皇元年御紀ハ天皇自親歴問有一老嫗云ニ於是天皇與皇太子億計將老嫗婦云ヽ此を古事記ハ老媼と有り万葉二十八ハ古之嫗乎爲而也如此許戀乎將沈如子童兒とも有る何れも於美那と訓べし然るを和名抄ハ於無奈と有ハ其より轉れる者ありて又其を於宇那とハ音便ハ類れたる後人の義抄ハ訓めて決めて古言ハ無き事ある者ありて名姥を於宇那と有を以見れば然る音便の言をも世ハ用ひ習へり者も所見たり

△濱松物語ニハ殿も上も並ひて兒姫君を御中ハ居奉りて抱お愛くしみ聞を給ふ事と有り文法ハ似なり

○中間置一少女の少女ハ傳六七十一ハ云り中間置ハ古事記ハ童女置中と有ハ例ーて三字引合せて那加ハ訓乎須恵氏と訓べし此置字を諸本共ハ須恵氏と訓るハ即老夫婦二人の間ハ挾ミて少女を居ヘ置を云ありて樋河上天淵記ハ但有老翁嫗中坐少女而泣と有て坐字を書るも然る訓の有ハ依て書るふめり△万葉六十四ハ野上者跡見居置而御山者射目立渡と有ハ鳥見を居置き射部を令立る由ありて十六十三ハト部座亀毛莫焼曽十七四十六ハ等奈夫波里毋利弊乎須恵底と有るどハト部を置き守部を置と云事なるを須

○二十二丁ニ知波
ヽ我可之數加伎奈
豆佐久安礼天伊
比之古度婆曽
和須礼加祢津
流

宇といふるふて即其處ふ居くしる事を云るり故常
ふ居を須和流とそふ其須字の言の活けるり定を
も居をも訓ヽ又ハ目ヽ瞿て云ル右ふ同ヽ舩ふて舩
とそり字書ふ舟著ふ○撫ハ加伎邪傳氐と訓り即搔撫
汝而不行也と見ゆ
の義るり万葉六二十五丁ふ天皇朕宇頭乃御手以搔撫曽
祢宜賜打撫曽祢宜賜十九四十一丁ふ矢形尾乃麻之路能
鷹乎屋戸尓須恵可伎奈泥見都追ふど有て甚く愛ら
ヽ憐ふむ形狀を云るめ偖斯る類の加伎と宇知と
ハ並び對へる言ふて古事記須勢理毘賣命御歌ふも
宇知微流。斯麻能佐岐邪岐。加岐微流。伊蘇能佐岐淤知
受。と有て右の搔撫打撫るどふ同ヽく宇知ハ我ふ

○二十一ふ相挑良比言
咸之加婆加吉結常
代尓至又

彼ふ移る意加伎ハ他ふり此ふ寄る義るるとふて言
の上ふ冠ふヽせ云るり万葉四二十二丁ふ覽而搔探支乎手
二毛不所觸者九二十三丁搔霧之雨零夜乎十三十六丁ふ
葦垣之末搔別而十四十二丁ふ可伎武太伎奴礼抑安加
奴乎十七四十二丁ふ可伎加蘓布敷多我美夜麻尓十九二十
一丁ふ之我婆多婆吾等尓可伎無氣るど有て何れも我
方ふ親ヽく寄附く意ふ云時ふ限りて加伎某と云事
るり其外ふも物を書く手を書く髮を搔く身を搔く
るとそふ加久の言ハ皆右と同じりる可ヽ又此
反ふて打上る打寄る打見る打聞くと云時ハ我ふり
他ふ移る意ふ云るれば自他共ふ其意るる言るる者
ふ撫とハ按摩(ナデクス)る謂るり次る脚摩乳手摩乳神の名

思合す可し―續紀第一詔ふ天下乃公民乎恵賜比撫賜
台平止奈毛隨神所思行佐久詔第五詔ふ此食國天下乎撫賜
慈賜波久第十三詔ふ又天皇御靈多知乃恵賜比撫賜天事
依豆云こ食國天下乎撫賜恵賜夫止奈毋神奈我良毋念坐
須ると有て何ぞも撫と恵とを並べられたり鈴屋大
人の解觸ふ凡て撫るハ愛らゝ憐れむ所作る故ふ
必ずも撫ざれども愛らゝ憐れむを云るり」と有が
如くあて万葉十八二十一丁ふ老人毛女童毛之我願心太
良比乎撫賜治賜婆十九三十九丁ふ吾皇乃天下治賜者物
乃布能八十友之雄乎撫賜等見る濱の松物語に然ぞ思捨給ひ一のど限無う
哀しき物と行ひの際こそハ掻撫つゝ生し奉給ふ心

人乎毋安夫左波受愍賜者ゐを有ゐ皆右の例ふ異ら
ゝず其より轉りて嚆賊の類を常ふ愛玩ぶ事ふゐ云
り万葉一七丁ふ八隅知之我大王乃朝庭取撫賜夕庭伊
五九十ふ志可登何良農比宜可伎撫而る
縁立之御執乃梓弓之云ると有る是ゐり然れども其
而哭之と有が如く實ふ其身を按摩りて愛ゝ悲
しぶすり出なる事云も更ゐり遊仙窟ふ摩挲を那傳
佐須流ふ訓り○哭之ハ那久那理と訓べし○汝等誰也と有
新宮本ふ依て
る誰也ハ多礼曾と訓べし古事記自檮原宮段ふ天
此第六一書ふ大己貴神問曰然別汝是
神御子間汝者誰也答曰僕者國神名謂贄持之子云と
ふ問汝者誰也答曰僕者國神名謂井氷鹿云こふ問汝
者誰也答曰僕者國神名謂石押分之子云こと有る此

古事記ふ豊受大神而注と有り其注ふ伊佐都と訓べき事
ハ伊佐なる足摩乳手摩乳神の下こふ如し

ふ問ふ問賜之汝等者誰と有ても同じく
熟田縁起ふハ汝等何人も多禮曾と有り其何人も
多禮曾と訓べき事
本よりなり又古事記
海宮遊行章第
一一書ふ問之曰君
是誰者と有る誰
者ゐ右も同じく又
古事記御天降段ふ
誰如此而居と有り又
其

思合す可し續紀第一詔ふ天下乃公民乎恵賜比撫賜
台乎止奈毛隨神所思行佐久詔第五詔ふ此食國天下乎撫賜
止慈賜波久第十三詔ふ又天皇御靈多知乃恵賜比撫賜天事
依巨云こ食國天下乎撫賜恵賜夫止奈毋神奈我良毋念坐
須ふど有て何れも撫と恵とを並べられたり鈴屋大
人の解觸ふ凡て撫るハ愛ら〳〵憐れむ所作る故ふ
必も撫ざれども愛ら〳〵憐れむを云るり」と有が
如くあて万葉十八三十一小老人毛女童毛之我願心太
良比乎撫賜治賜婆十九三十九丁小吾皇乃天下治賜者物
寺登能倍賜食國之四方之

人乎毋安夫左波受愍賜者ゐ之有ゐ皆右の例ふ異ゐ
らず其より轉りて嘜戯の類を常ふ愛玩ぶ事ふゐ云
り万葉一七丁ふ八渴知之我大王乃朝庭取撫賜夕庭伊
五九丁ふ志可登何良農比宜可使撫而ゐ
縁立之御執乃梓弓之云ると有る是ゐり然れども其
而哭之と有が如く實ふ其身を按摩りて愛ら〳〵悲
しぶより出たる事云ゐ更ゐり遊仙窟ふ摩挲を那傳
佐須流ふり出たる事云ゐ更ゐり遊仙窟ふ摩挲を那傳
と訓り○哭之ハ那久那理と訓べし○汝等誰也と有
新宮本ふ依て
ゐ誰也ハ多礼曽と訓べし此等六二書ふ大己貴神問曰然別汝是
古事記白檮原宮段ふ天
神御子間汝者誰也答曰僕者國神名謂贄持之子云と
ふ問汝者誰也答曰僕者國神名謂井氷鹿云こふ問汝
者誰也答曰僕者國神名謂石押分之子云こと有る此

古事記ふ蓋其置中而注と有り其注ハ伊佐都と訓べき事
次なる旦之擘乳手摩乳神の下云ふが如し

ゐ乃問賜之汝等者誰と有て是と同しく熱田縁起ふ汝等何人も多禮之曽と訓べき事本よりなり又古事記海宮遊行章第二書ふ乃問之曰君是誰者と有る誰者ハ右ふ同じく古事記御天降段ふ誰如此而居と有り是

等の誰也を多礼曽と訓ぶなる也此ふ依ゝれなめ（記傳ふ）
者ゐり神武天皇御紀ふハ其を汝何人と有を也此例
ふて汝者誰曽と訓つ可き所ゐる者ゐり雄略天皇四
年御紀大御歌ふ例（他）柯舉能居登（誰）飲（大）寝磨陛（前）你麻鳴須（養）
と有を古事記ふハ多（誰）礼曽意（大）富麻（前）幣尓麻袁須（奏）と有り
百葉十四（二十）ふ多礼曽許能屋能戸於曽夫流尓布奈
末尓和家世乎夜里氐伊波布誰許能戸乎と有ゐど多
礼曽と云（時）特ハ誰（や）ゝ人ゐるぞと尤め（て其所以を問）云ふ語ゐるふ
り風神祭詞ふ誰神曽天下の公民乃作作物乎不成傷
神等波我御心曽悟奉（止）宇氣比賜支（イヅヒノカミ）と有る誰神曽也

（合）哭之如此耶（紀）熟田縁起ふ汝等何人哭泣如此邪と有ふ依て加久耶伎伊佐都流登問給問渡を訓へ下なる脚摩乳手摩乳神の所ふ説べし此訓の狀古事記ハ神段ふ大穴牟遅神見其苦言何申汝泣伏と有ふ似たり

亦上ふ異ゐらず古本ふ此を多礼曽夜と云時ハ古事記高比賣命の歌ふ河
治志貴多迦比古泥能迦微曽也と有る是ふて其と其
物を指云ふ歎聲を添て他ふ示す意ゐるべ少義異
ゐり詞玉緒二巻ふ拾遺集ふ漢り（爲）海士の教へ
し何方やゝ新勅撰集十三ふ如何ゐり時ゝや
云ゝ源氏總角巻ふ何時ゝやもゝと云歌共を引て
此（曽）（夜）ハ問係る曽ふ夜を添たるゐり夜ハ疑の夜ふ
非ず歎息の夜○何爲ハ伊加尓斯氐加世と訓べし万
葉三（二丁）四十ふ如何爲鴨從乎不離有年十一（三十六丁）ふ（何）如爲
鴨吾戀將止ゐどの如く物を問係る辭ゐり五（二十九丁）ふ
此時者伊可尓可之都ゝ可汝代者和多流と有も右ふ
同（ド）意味ゐる者ゐり○吾是國神の吾是ハ阿波と訓
べし右ふ引る古事記ふ僕者國神と有と御紀ふハ何

（其第四ノ書ハ彼處ニ有ニ神名事勝國勝長狹ニ云ヘリ）

ゆゑに臣是國神と書されたるを合せ訓べきふ等し古事記ふい此事を故其老夫答曰僕者國神大山津見神之子焉と見え熟田縁起ふに對曰僕是國津神大山祇之子也（と有）たるふて其出自明らかなる者ゆゑ若て右の僕者國神ハ下るゆる僕名云ことこ云ヘ係りて大山津見神を指て國神（と）云ふい非るゆゑ口訣ふ國神猶言地主也と有ハ然る事ふて天孫降臨章ふ其地有一人自號事勝國勝長狹皇孫問曰國在耶以不對曰此焉有國請任意遊之と有を其第二ノ書ふ乃召國主事勝國勝長狹而訪之對曰是有國也取捨隨勅ど有を以て國神

（此事委しく傳二十九十五大國主神の下よりゆゑ必考合すべし）

と云ハ各其地ふ主たる神の謂ゆる事信ふゆゑ（は）足ゆゑ此より推すふ其正書ふ蓋與國神相戰而然歟と有も其葦原中國ふ地主と有る神の義ふて常ふ天神地祇と云ふ並ての例ふハ非る可（狀ゆゑ）し又其第一ノ書ふ時有國神号天探女（天）と有も万葉三ノ二十ノ二丁ふ久方乃天之探女之石船乃泊師高津者淺尓家留香裳と有れハ今の難波邊の地主ゆゑ可しゆる可し又古事記御天降段ふ僕者國神名猿田毘古神也と名乗申せるも其皇御孫尊の天降ゆ御在し坐し著せさせ給ふ國の地主神と申す義ゆゑ又景行天皇四十年御紀ふ蝦夷賊首嶋津神

合葉一寸ハ小樂浪乃國都美神乃浦佐備而荒有京見者悲モ之有ル其近江舊堵の地の地主神の荒ひ坐す由ハ取成ハ[illegible]ル者なり

天皇親師諸皇子丹師東征至速吸之門時有一漁人乘船而至天皇招因問曰汝誰也對曰臣是國神名曰珍彦之有と始さして

神國津神と有も其島と國とふ主たる神をうるめ其外地名を以て神社の名と爲るとい格別ふる事ふして其地名より某津彦某津姫と云神名ハ何れも其地主ふるふて此ふる國神の謂ふりも知べし又神武天皇御紀ふ至吉野時有入出自井中光而有尾天皇問之曰汝何人對曰臣是國神名爲井光此則吉野首部始祖也又更少進亦有尾而披磐石而出者天皇問之曰汝何人對曰臣是磐排別之子此則吉野國樔部始祖也及緣水西行亦有作梁取魚者天皇問之對曰臣是苞苴擔之子此則阿太養鸕部始祖也と有も各其地主の國神ふして其子孫も其地ふ在て殊ふ國俗此神を右の如く古事記又寛神の義明らかるめ平熟田緣起等ふ大山祇神ふる由所見たるハ大ふ所由有る御事とふふハ所見たりけれ然るハ傳十百二十丁

生玉社神名帳ハ堅牢地神國津大明神と云ひ伊賀國阿拜郡敢國神社を國津大明神と有ふも其地を主領く神の謂ふふふ以も曉ふ可し此

ふ註るが如く其大山祇神と闇靈神とハ御夫婦の御中間ふ御在し坐が故ふ亦名を大山罪御祖命とも申奉る事ふるが其夫神大山祇命ハ山津姫命とも申奉る事ふるが其夫神大山祇命ハ也寶鏡開始章ふ天香山の名有れバ正しく其山ふ就なる神ふ渡らせ給へる其第ニ一書ふハ山雷神と有て即天石窟隱の御時ふ五百箇眞坂樹八十玉籤を採せさせ御在し坐しける神ふるむ渡らせ給へりけれバ其神体ハ例の上天ふ留まらせ給へる事申すも更ふり然るふ其上天ハ更ふり此國土ふて也在と有ける山岳ハ也皆其ニ神の所知せる處ふ有けれ

バ其御子神等を分ち居置て其山ニを令治給へる
ガ此二神ハ一ツ其烏上峯より係て出雲伯耆の邊の
山神ハ御在すゆゑ可ー又其八岐大蛇ハ下五十九丁
ハ註るガ如く近江國氣吹山の山神なるを其二神と
共ハ相爭ふ〳〵て大蛇ハ成を果めて終ハ素戔嗚尊
ハ滅ぼされ奉りし者と所見たり又此二神ハ稲田
宮主簀狹之八箇耳神と申す御名の八箇耳ハ天上ハ天
迦久神の有る准ら小鹿を主りる由ハ非じと
思ふも捨へ〳〵ざる心ちす猶次ニハ云へきゆゑ然
バ共ハ佗神の子なるべして等〳〵山神より出たり
〳〵神なるべ〳〵同〳〵素戔嗚尊の御子ふる八十神ハ惡し

く有て大已貴神ハ切生
るなどの事を思ふ可ー○脚摩乳手摩乳ハ古事記ハ
ハ足名椎手名椎と作れ熱田縁起ハ足名槌手名槌
と作乃脚摩手摩ハ字の知くハて口訣ハ老公撫少女
哭以稱之乳語助と見え纂疏ハ因其子而得名蓋父母
撫摩其子之手足而乳養之也と有ハて其名義明
なり偖此神の御事を第二一書第二一書ハ稲田宮
主簀狹之八箇耳と見え古事記ハ稲田宮主須賀
之八耳神と也有其稲田宮主ハ此下ハ因勅之曰吾
兒宮首者即脚摩乳手摩乳也故賜号於二神曰稲田宮
主神と有ハ後ハ素戔嗚尊より賜ハる名なり又

簀狹ハ出雲風土記ふ飯石郡須佐郷有り須賀ハ下ふ
遂到出雲之清地乃言曰吾心清之於彼處建宮と所
見て清地此云素鵝と注されたれば右ふ吾兒宮と有
る處ふ〜て其大原郡の地名るれば此も其宮出來て
後の称るる事云も更るめ然れば八箇耳神と申すで
其老夫婦を合せたる始よりの名ありけむを此ふ素
戔嗚尊の汝等誰也と問給へるふ其童女を圍ミて脚
を摩り手を撫つ〜愛ゐ〜〜憐〜〜居る狀を以て我
名と對へ進〜せて其大神を〜て愛憐の御心を發さ
せ奉め其御扶助を得奉〜むと明白ふ申奉れ〜を其

事の由ふ縁て其大蛇を平〜げさせ御在〜生て不意
〜神劔を得させ給ひ其を天神の御許ふ獻せ給ひ
て皇御孫尊の天津日嗣所知省す大御璽と成り又其
神の御女奇稲田姫命を后神と定めさせ御在〜生て
其令生給へる大己貴神ハ〜も天下千萬國を作堅め
させ御在〜生ける大國主神ゐて渡〜せ給へるるど
の御事ハ申すも更るめ又此御妻問の御事ふ縁て素
戔嗚大神の直ふハ根國ふ入御在〜坐ずして此顯國
ふ留住せ給ひて國引の御政ハ更るめ諸御子神等ふ
命せて衣食住の御事るどを起〜給ひて甚貴く甚可

異き大御功績を立させ御在し坐ゆる儿其始ハ此ふ
中間置一少女撫而哭之と有る其事ふ根據せるを以
て定めゆる神名とい成ふたりけ〳〵此名の狀を以て見る時ハ甚
く忌ハしき事も起ゆる如くあれども其忌いとりり
けゆる事ふ依てこそ然る甚しき善事の本とハ成つれ
バ然負給ふ可き事ありけゆ此とい異ありてどル傳五
卷下ふ註るゆ如く彼二柱御祖神ル遘合の始
ふ相誘ふいせ給へる事ふ依て伊弉諾尊伊弉冊尊と
御名ふ負せさせ御在し坐るふ等しくるむ有べき
偖其乳を右ふ引る簒疏ふ乳養之也と說せ給へれど
も度會延佳說ふ乳字を乳哺の義ふ注させ給へるハ
拘りなる樣ふ思ゆと云るハ然る言るり故思ふる
口訣ふ皇哀傷深も云るハ卓見ふて右ふ撫而哭之と

有る撫ハ脚摩手撫の言ふ當る事右ふ云るゆ如く哭
之ふハ乳の言るむ當る可うめけるを今此ふ合せて
思ふる此ハ伊佐知の言の約ゆる者る儿脚摩注手摩
泣の意なるゆ上下の音相迫りて那豆知とい成ゆる
者るり古事記ふハ此ふ哭と有る折を童女置中而泣
と有を以て證と爲べし又速須佐之男命不知所命之
國而八拳須至于心前啼伊佐知伎也と有を四神出生
章第六一書ふハ是時素戔嗚尊年已長矣復生八握鬚
髯雖然不治天下常以啼泣恚恨と有り此ふて伊佐知
ふ泣字の能當ゆる儿を見る可し又其正書ふ儿且常以

内閣文庫
消印
宣政文庫

哭泣(ナキイサハルナ)爲行と見え其第六の一書ハ至於火神軻遇突智之生也其母伊弉冊尊見焦而化去于時伊弉諾尊恨之曰唯以一兒替我愛之妹者乎則匍匐頭邊匍匐脚邊而哭(ナキ)泣流淚焉(イサチカナミニナミダ)と有て何れも哭泣を那伎伊佐都と訓るハ上ゐる何爲哭之如此耶を熱田縁起ハ何人哭泣(ナキイサツル)如此邪と有ハ右ハ當る時ハ乳ハ全く伊佐知の言の切ゐる事著明き者ゐゆ傳ハ十ハ其哭泣の意を說ハ十

小合せ考ふ可き者ゐゆらし因云谷重遠說ハ山城國賀茂有鴨脚氏相傳此神之裔也と云ゐハ何ハ依ゐる說ゐるゐゆ其家ハ今賀茂縣主と云事ゐハ姓氏録大和國神別地祇小賀茂縣主大神朝臣同但大國主神之後也大田ニ根祢古命孫大賀茂部美命一名大賀茂(ハ)足尼奉齋賀茂

国立公文書館
National Archives of Japan